

小野寺香帆編

小野寺香帆編

一月二〇日（金）

章二さんは、勤め人時代のお友達と合同の誕生日会だと三宮へ出かけて行った。新年会も兼ねた毎年の恒例行事。お昼も晩ご飯も考えなくていいのは気楽だけど、自分一人の食事は、それはそれで面倒臭い。

ちょっと暖かい気候に誘われて気ままに出歩いてみたら、何故か、ロイヤルホストでFUDGEに向かって筆を走らせている。もう少し暖かくなればイーゼルと椅子を持って絵を描くのだけでも、それをやるにはまだ寒い。

前に書いた手書きの線画をiPadに取り込み、その上に何色を置くか考えながらああでもない、こうでもない何度か塗っては消してみる。絵具と紙では難しいことも、デジタルなら簡単にできて非常にありがたい。

流石に漫画家さんはいそうにないけど、家の外に出てファミレスで絵を描くと、なんだか仲間入りしているようで楽しくなってきた。軽いランチにドリンクバーを注文し、時間を忘れて色塗りに集中していると、隣の席から視線を感じる。手を止めて、顔を上げた。

「もしかして、小野寺ルミちゃんのお母さん？」

小学校中学年ぐらいの男の子を連れた二人組の女性に、声をかけられた。男の子の隣に座る女性は彼の母親っぽいけど、その向かいに座っている女性がマジマジと私の顔を見つめている。

「ああ、やっぱりルミちゃんのお母さんですよね？」

娘の名前を何故知っているのか。ルミと私とをどうやって結び付けたのか。一人で困惑してフリーズしていると、女性は「一人で興奮しちゃって、すみません」と謝った。

「ルミちゃんの仕事仲間です。何度かZOOMでお見かけしました」

そう言われれば、ビデオ会議しているところに入っちゃって、ルミに何度か怒られたことがあったつけ。私からはハッキリ見えなかったけど、向かいの女性も私に見覚えがあるらしい。

「あら、そうですか。その節はお世話になりました」

「いえいえ、こちらこそお世話になっております。えーっと、私が武藤で、あつ

ちが高橋です。で、」

武藤と名乗った女性が男の子の方を見ると、「ヒラクです」と自己紹介した。

「啓蒙とか自己啓発の啓で、ヒラク」と、彼の母が教えてくれる。高橋さんは申し訳なきそうに口を開いた。

「ルミちゃんこの間、大丈夫でした？」

「この間、何か？」

「先週、ちよつと飲ませすぎちゃいまして……」

「あら、そうだったんですね」

ルミからは、特に何も聞いていない。高橋さんは不思議そうな表情を浮かべているが、武藤さんは「香織さん、ルミちゃん、今は同居してないのよ」と、こちらを向いて「ですよね？」と確認してくる。「ええ、まあ」と返すと、

「そうですねえ。五年ぐらい前から背景が変わったなあと思つてたら、家が変わつたつて言つてました。えーつと、」

武藤さんは私の顔を見て、言葉に詰まった。

「あ、香帆です」

「香帆さんのお住まいは？」

武藤さんの雰囲気呑まれ、ありのままに答えると「へー、良いところにお住まいですね」と帰ってきた。武藤さんはルミの家の近く、高橋さんは南茨木、天王小学校の近所だとか。

いつの間にか、武藤さんが横に座り、高橋さん達が向かいに座る。iPadの絵を見せたり、啓くんにお絵かきさせてあげたり。夜まで一人寂しく過ごすと思つていたら、娘のおかげで縁ができた。ルミ、ありがとう。

初出 令和三年二月一七日 MAGNET MACROLINKにて公開

二月八日（水）

今日は久しぶりにスケッチブックとイーゼルを抱えて、市役所近くのIBALAB®広場、中央公園で屋外スケッチ。水も冷たいし、荷物にもなるし、水彩絵具じゃなくて色鉛筆でささっと仕上げた。

防寒着はすっかり来ているものの、風が少し強い。身体がすっかり冷える前に、商店街の一本裏にあるレトロ調の喫茶店、ワンシーンへ駆け込んだ。ランチタイムだったけど、水曜日は少し空いているらしい。それほど待たずに中へ通してもらった。

日替わりのハンバーグランチを平らげ、食後のコーヒーを出してもらって、さつきスケッチブックに描いた絵を改めて見直す。一人で矯めつ眇めつ眺めていると、「こうした方がいいんじゃないですか？」と若い男性が、絵の一部を手で隠した。

最後に描き足した手前のボールが、全体のバランスを崩していたらしい。テーブルを挟んで目の前に立っていた男性は、隣の席に荷物を置いて、私の横に座った。「それか」と、スケッチブックの隣に置いた色鉛筆を眺め、私の目を見る。私が頷くと彼は色鉛筆を一本摘んで、手前のボールに色を塗り重ねた。色味が変わる事によつて、さつきとはまた違う絵になった。

「勝手にいじつて、ごめんなさい」

「いえいえ。この方が素敵な絵になりましたから」

若い男性はもう一度「すみません」と言い、色鉛筆を戻して自分の席についた。仕立ての良さそうなスーツと、ほんのり鼻をくすぐる木のいい香り。ビジネスマンっぽい出で立ちをしているけど、ただものではない雰囲気微妙に漏れている。彼はメニューを見て、サツとブレンドコーヒーを注文した。スマートフォンを見ながら、お店の時計を見上げている。

「おお、悪い悪い。待たせたな」

お店のドアを開け、作業着の男性が彼の前に座った。作業着の男性は店員を読んでメニューを見ると、「メシ食ってもいい？」と彼に尋ね、返事を待つ前に日替わりランチとセットのブレンドコーヒーを頼んでいた。食事より先に、コー

ヒーが運ばれてくる。

作業着の男性は、運ばれてきたコーヒーを一口飲んだ。

「水曜日は休みじゃなかったっけ？」

「現場は休みでも、色々あんのさ。そつちは昼休み、だっけ？」

「そう。貴重なね。久しぶりに兄弟でメシ食おうって言うから抜けてきたのに、直前で遅れるか？ 普通」

「だから、色々あるんだって」

「晃の見積もりの甘さは変わらないな」

「兄貴が細かすぎるんだよ」

晃と呼ばれた作業着の男性は、運ばれてきたランチに手をつけた。スーツの男性は、それを見ながらコーヒーをゆっくり飲む。

「瑞希と原田くん、お前の仕業だった？」

作業着の男性は、食事を口に運びながら彼の方を見る。

「聡太みたいな変な虫より、アイツの方がマシだろう？」

「聡太って、お前のサッカー友達の」

作業着の男性が頷くと、彼も納得した表情になる。

「変なことしたら俺がぶっ飛ばすけど」

「そういうキャラじゃないな。免疫はなさそうだけど……」

作業着の男性と彼は、ニヤリと笑う。ジッとそちらを見てみると、スーツの男性がこちらに視線をくれる。何かを言いたげに片目を瞑る仕草は、とてもこなれているようだった。

二月一九日(日)

郁美さんが、妹の敬子さんと共に我が家を訪れてくれた。章二さんは相変わらず外出中で、娘のルミと一緒に来客応対をしてくれている。

「台所、お借りしてもいいですか？」

郁美さんはプチフランスの袋を持って、台所に入って行った。敬子さんの誕生日が今日で、私とルミもお相伴いただけるらしい。ルミにお皿とフォークを出してもらい、私は人数分のお茶を用意する。郁美さんは手早くケーキをお皿に出した。

「私たちもいただいてしまつて、いいんですか？」

ルミは可愛らしい小分けのケーキを食卓に並べながら、敬子さんに尋ねた。

「いいのいいの。手土産がたまたまケーキになっただけだから」

「妹の三三歳を祝つてあげてください」

郁美さんが笑いながら敬子さんの隣に座る。一個ずつ違うケーキを順番に選び、残つた一つは箱に戻した。お誕生日の歌は省いて、目の前のケーキにかじりつく。程よい甘さが、章二さん秘蔵の渋めの紅茶とよく合う。

「あ、ムジカの紅茶だ」

敬子さんが紅茶のパッケージを見て言った。

「あの辺の調味料も、あの辺のチョコレートも、そこらじゃ買えない輸入食品よ」
郁美さんは台所に並べてある瓶やストッカーに入っている袋を指差した。

「この間持つて来ていただいた調味料も、南京町とかで買ったモノですよね？」

「ええ、まあ。お菓子とか紅茶は、主人の好みというか、こだわりに付き合わせてるところもあるんですけど」

「ホンモノを足で買え、だっけ」

ルミの言葉に頷くと、敬子さんが驚きの表情を浮かべた。郁美さんは納得したように小さく頷いて、「定期的に三宮とか、芦屋に行かれるんですか？」と訊いて来た。

「最近私はたま〜にですけど、主人は勤務先があちだったんで、しょっちゅう」

「へー」

引き出しの上に、港に停泊中のタンカーと共に撮影された写真が飾つてある。郁美さんは立ち上がって写真を覗き込み、ルミに「どれがお父さん？」と尋ねた。彼女は真ん中の方にしゃがんでいる男性を指差した。

「海の男つて感じですね」

郁美さんの隣で写真を見ていた敬子さんは、ルミに「めちゃくちゃ厳しそう。怖かったでしょ」というと彼女は首を振つた。

「ガンコで面倒臭いけど、怖いって思ったことは一回も」

「へー。そうなんだ」

彼女たちは食卓に戻つて来て、紅茶に口をつけた。ケーキのお皿が空くと、郁美さんがスツと立ち上がり、お皿を洗つてくれる。

「お客さんなのに、すみません」

「いえいえ。勝手にお邪魔してますから」

郁美さんは残りのケーキを新しいお皿に移し、ケーキが崩れないようにふんわりラップをかけて仕舞つてくれた。

「それでルミちゃん、本題なんだけど」

敬子さんがルミに話を切り出した。

「例のプロジェクトに、医療用テントも転用できないかって話を今してて」

「医療用テント？」

「フードトラックの移動販売に、医療用のテントとか間仕切りとかコンテナとか追加できたら、もう一個差別化ができないかと思つてて……」

敬子さんは昨秋まで看護師として医療現場で活躍されていて、この二、三年で急増した主に医療用の商品がそれなりの在庫となつて積み上がっているのはとルミに告げた。単純なデリバリー、移動販売も定着してきた今、いくつか仕掛けを増やさないと厳しい気がする、と「あくまでも素人の意見として」と口にした。その観点、アイデアがいいのか悪いのかは私には良く分からないけど、ルミの表情が少し変わったような気がする。

ひよんなことで協力することになりそうな、郁美さんの独立開業プロジェクト。まだ見ぬ楽しみが山のように出て来そうだな。

三月七日（火）

ティ・コ・ラッテーの前から北上して、キリン堂の交差点を万代の方へ曲がる。万代でも火曜日の売り出しをやっているけど、今日の目的地は平和堂。お店の前を素通りして、マクドナルドのさらに先、スターバックスの駐輪場に自転車を止める。

自分用に、ムレスナティーのマスクットフレーザーを買う時に小休止したけど、それまで延々と自転車を漕いできたもんだから、少し身体が冷えてしまった。タイムセールにもまだ少し早い。一杯だけコーヒーを飲んだって、混み出す前にレジまで行ける。

隣のマクドナルドもそれなりに人がいたけど、こちらも案外混んでいる。窓際の一人席は電源を取りながら長居している人がチラホラ。おしゃべりな同年輩も優雅な午後を楽しんでいるらしい。

できれば店内で腰を落ち着きたいけど、お店の真ん中にある大きなテーブル席しか座れなさそうだ。図書館で借りた本やら、さっき買った紅茶やらが入った買い物袋を椅子に置いて、ホットのドリップコーヒーを注文する。隣のドライブインも忙しいらしく、店員さんはあちらこちらに目まぐるしく動きながら、私のコーヒーを出してくれた。

さて、久々に中央図書館まで行って借りた、芥川龍之介の『河童』でも読もうかな。いや、ようやく借りられた気になってた雑誌の方を開こうか。大きめの冊子を買った物袋から取り出してみる。

顔を上げて早速ページをめくろうと思ったけど、斜向かいの席に座る若い女性に気がなった。ルミと同年ぐらい、見覚えがあるような気がするけど、どこかで見たっけ？

ジッと顔を見ながら記憶を辿っていると、視線に気がいたらしく相手の女性と視線がかち合った。彼女はこちらに軽く会釈をする。ちよつとぶつきらばうに見えるこの娘は確か……

「野村さん？」

向こうは「どうも」と会話を切り上げようとする。そういえばルミから、マク

ドナルドで配達をしている友達がいる話は聞いた気がする。「彩夏に嫌われたかも」と少し前に落ち込んでいたのも思い出した。

彼女とルミは高校まで一緒に、そこから野村さんは関東の大学へ進学し、そのまま就職したと聞いた気がするけど……。

野村さんは軽く挨拶をしてからは、こちらの視線を一切気にすることなく、どこか暗い表情でコーヒーを啜っている。ルミと仲良くしていた頃は、底抜けに明るい娘だった覚えがあるけど、そんな印象は微塵も感じさせない。

時折ため息をつきながら、かなり上の空といった様子。動きもいちいち緩慢で、覇気というか、元気がない。

自分のことをしようと雑誌に目を通すものの、なんとなく彼女のことを気になつて内容が入ってこない。ジッと観察していると、野村さんは席を立ち、自分のカップを解体してゴミ箱に入れた。私も彼女と同じタイミングでコーヒーを飲み切り、野村さんの後に続いてカップを片付けた。

店を出る彼女の後を追いつ、外に出たところで声をかけた。

「もし良かったら、またルミと仲良くしてあげて」

そのまま行ってしまうかと思つた野村さんは足を止め、両手をポケットに突っ込んだままこちらに振り向いた。

「嫌じゃなかったら、ルミも私も、いつでも相談に乗るから」

彼女は何も言わず、私に軽く頭を下げて、隣のマクドナルドへ向かつて歩いていく。少し先まで歩いてから立ち止まり、身体ごとこちらに向き直る。今度は、両手をポケットから出し、頭を下げた。どう声をかけるか迷っている間に、彼女はスッとマクドナルドの店内へ入って行った。

初出 令和三年三月一二日 MAGNET MACROLINKにて公開

三月一八日（土）

大きな公園に面した席に座り、はしゃぎ回る子供たちを眺めている。遊具の周りには比較的年若いお父さん、お母さんもいて、親子連れで楽しそうに遊んでいる。芝生の方では、大学生ぐらいの男の子たちがボールを追い回す。時折、それらの間を縫い、私の目の前を横切って、ペースを変えずに走っていく人もいる。十分に間隔をとって、二人ぐらい？

私なんて、少し遠出して、普段より多めに歩いた程度で足腰にきているのに、少し下ぐらいの人たちが週末にしつかりランニングしているなんて、立派だわ。とても真似できない。

「すみません、お待たせしました」

一人で感心していると、後ろのドアを開けて浪川さんがコーヒーを運んできた。「外の席しかなくて、申し訳ない。砂埃、大丈夫ですか？」

彼は、私が頼んだドリップコーヒーを目の前に置いてくれた。

「全然問題ないわ。広い空も気持ちいいし」

口を動かしながら、財布を取り出そうと鞆の中を見る。すると、何かを察したらしい浪川さんが、手を横に振った。

「いや、いいですよ。一日付き合っていたいただいたお礼です」

「あら、そう？」

「それに、うちの連れが娘さんにご迷惑をかけたみたいなので、お詫びというか浪川さんは心底申し訳なさそうに眉根を寄せる。

「そう？じゃあ、ごちそうになります」

コーヒーを口に含む。心持ちスツキリしているような気がするミルクと、コクのある微かな甘さが鼻を抜けていった。

「無脂肪乳とブラウンシュガー、でしたよね。娘さんから聞きました」

さつきまでの表情をコロッと変えて、ちよつぱり悪戯っぽい顔を浮かべている。

「ルミと、随分仲がいいんですね」

「僕が、というよりは妹の瑞希が、ですかね。仕事も何度か一緒にさせていただいているみたいで」

妹さん？ そう言えば、そんな話を「迷惑」の件で聞いた気もする。その娘と何かトラブルがあったという話ではなく、ルミが一人で勝手に自爆した、みたいなことを先週辺りに聞かされたっけ。

「それにしても、郁美さんのパワー、凄かったですね。僕だけだったら、気圧されてましたよ。本当に、助かりました」

浪川さんは深々と頭を下げた。確かにちよつと線の細い印象がある彼と、パワーな郁美さんとは分が悪そうだ。デザインの領域ではちよつとした生意気さも発揮できるのに、アーティスティックな部分を全面に押し出すにはまだ若いかもしれない。とは言え、彼やルミの周囲にいる若い男の子たちのリーダーシップがないと、乗り掛かった船は泥舟のまま沈んでしまう。

「郁美さんも浪川さんも目的は同じだし、お互いにプロなんだから、遠慮なく意見を出せばいいのよ」

「それはそうなんですけどね。強く来られそうなのが、どうも苦手で……」

郁美さんも気が強いし、プライドも高いし、声も割と大きい方だけど、出会い頭の軽いやりとりで、良くない方に学習しちゃったかしら。浪川さんは、頭の後ろを指で軽くかきながら、コーヒーを啜った。半分笑ったような表情と、微妙に別のことを考えていそうな視線が少々気になる。

「苦手なら、克服してみませんか？ 私もフォローしますから」

「克服？ 克服っていうか、苦手っていうか……」

浪川さんの視線が泳ぐ。何気なく見えて、これは案外、根深い問題かもしれない。

コーヒーで口を湿らせ、自分で自分に、ほんの少しだけ気合を入れ直した。

初出 令和三年四月二日 MAGNET MACROLINKにて公開

四月九日（日）

ルミが買ってきた風月庵の桜餅を緑茶と共にいただいた。私がお茶を淹れ直している間、彼女は椅子に座ったまま、頻りに上半身を動かしていた。

「昨日の筋肉痛？」

ルミは頷いて、「クールダウンもしつかりやったんだけどね」と、腕に手を添えながら「いたたた」と苦痛を漏らした。

「明日には何ともないといいんだけど」

「流星にそこまで老いてないでしょ。大丈夫よ」

若いと言いつ切るには微妙なお年頃ではあるけれど、まだまだ三十路には余裕がある。アラサーはアラサーで、「お肌も水を弾かなくなってきた」とか言っていたけど……。

ルミの湯飲みに、新しいお茶を注ぐ。「老いつて言い方ないでしょう、老いつて」とブツクサ言いながらも、彼女は黙ってお茶を啜った。

「昨日、大変じゃなかった？」

「全然平気。久しぶりに彩夏ママともお話しできたし」

急に娘から、「彩夏の子供を預かって」とメッセージが来た時は構えたものの、お子さんと共に彩夏さんのお母さまもお見えになると分かっていたから、へっちゃらだった。もつとも、大人しい子だったから、彩夏ママから情報を引き継げれば、一人でも見れなくはない気もする。

「そういえば、透くんのところのお子さんも、この間のさくらまつりで見かけたわ」

「えっ？」

先週の土曜日、元茨木川緑地をお父さんと共に歩いていたら、すっかり大人の顔つきになった透くんから声をかけられた。彼は奥さんと共にベビーカーを押しながら、桜の下を歩いていた。

「透くん、今月から関西でお勤めなんだって」

「それは知ってる。ウチで本人から直接聞いた」

ルミは表情を変えずにサラッと言った。透くんと会った時は立ち話で挨拶ぐら

いしかなかったけど、ルミが差し出したスマホには、透くとあつちの家で撮影したらしいツーショット写真が写っている。

「透くんも、中々やるじゃない」

「えっ。お母さん、あつちの味方？」

「どっちの味方とか、そう言うことじゃなくて……」

彼ぐらいの大胆不遜な振る舞いがルミにもできれば、今頃、彼の奥さんだったかもしれない。いや、「そうなる」には問題がいくつかあったから、学生時代に破綻したのだけど。

「貴女って、本当に真面目よね」

「そりゃあ、お父さんの一人娘だから」

我が子ながら、不器用なぐらいの真面目さで、潔癖が過ぎてズルいことが微塵もできないのは生きにくくないのかしら、と今更ながら思ってしまう。お父さんの方針に異を唱える強さを貫けなかった私の責任でもあるんだけど。

「もうちよつと、不真面目に生きてもいいんじゃない？」

ルミは鳩が豆鉄砲をくらったような顔で、一瞬動きを止めた。「不真面目について？」と訊いてきた。

「不真面目についていうか、豪胆っていうか、ワガママっていうか」

「豪胆、ワガママ……」

ルミは少し上を見ながら、私の言葉を口の中で咀嚼する。牛のように何度か反芻したらしく、一人で何度か頷くと、だんだん表情に力が戻ってくる。

「もうしばらく、ダンス頑張ってみようと思う」

ルミの力強い宣言の裏に、色んなお願いが込められていそうなのも察知した。

娘がどんどん元気に、幸せになってくれるというのなら、私も精一杯協力しよう。娘よ、程々に頑張れ。

初出 令和三年五月三日 MAGNET MACROLINKにて公開

四月二八日（金）

喫茶店を出て、衣料品コーナーをぐるつと周り、一階まで降りるエスカレーターに乗る。前を歩く郁美さんは領収書を財布に仕舞いながら、「ご足労いただいて、本当にすみません」と言った。

「いえいえ。それより、ごちそうさまでした」

「明日はその分、よろしく願います」

彼女は一階に着いたところで腕時計を見ると、「すみません、私、急ぎますんで」と少々慌てた様子で真っ直ぐ外へ出て行った。

金曜日の夕方、食品売り場も奥のフードコートも賑わっている。私も郁美さんのようにそのままバスで真っ直ぐ帰ってもよかったけど、あまり来ないアルプラザの中をグルッと見てから帰ろうかしら。

水尾に住んでた頃は平和堂もよく行ったけど、今の駅前通り界限では二駅前の阪急オアシスカ、その裏手のサンデイに行くぐらい。市役所近くの業務スーパーもたまーに見るけど、お父さんと二人であの量は中々食べ切れない。

ふらふらとフードコートの方へ歩いてみるものの、学生さんやご近所らしい皆さんがいっぱいいて、しばらく待っても座れる気がしない。たまにはマクドナルドでジャンクフードにありつく手もあったけど、バスに乗って持ち帰るほどではない。

手前のパン屋さん、シャトレレーゼも気になるけれど、何か一つぐらいお土産に買って帰ろうか。アルプラザへ来る途中にあったパン屋さんも美味しそうだったし、ここは甘いものにしておこうかな。

洋菓子とかケーキも美味しそうだけど、そうそう、かしわ餅。白いこし餡とよもぎの粒餡がセットになった奴と、ピンクの味噌餡も一つ買って帰ろう。レジの横に置いてあったアップルパイも一緒に買って、一つにまとめてもらった。

あとは、適当に食品売り場を見て行こう。朝の食パンとヨーグルトは月曜日の分まであったと思うけど、日曜日のお昼と晩ご飯をどうしようか。調味料で切らしたものは何かあったっけ。

買い物カゴをカートに乗せ、特設青果コーナーから見て回る。豆ご飯はこの間

やったし、アスパラも割と食べたのよねえ。ブロッコリーを一つと、きゅうりを一袋にしようかな。

グルッとカートを動かして、常設の野菜もチェックしていく。いつものお店ではあまり見かけない、野菜用調味料なんか見かけてしまうと、つついっせいでカゴに放り込んでしまう。できるだけ重たいものは買わないようにして、軽そうな変わり種、限定フレーバーだけにしよう。

そう心に決めたのに、お酒のコーナーで物珍しい缶ビールと缶チューハイを二本ずつ選んでしまった。カード入れの中から久々にホップカードを取り出して、ホップポイントを加算していく。半自動のレジで一瞬戸惑ったものの、レシートにはちゃんとポイント加算ができた旨が載っていた。

ちよっぴり重くなってしまった荷物を提げて、アルプラザの外に出る。バス停に近い出入り口には、「頭上注意」の注意書き。上を見上げれば、燕が巣を作っていた。

確か、目の前の通りを左へ抜けて、交差点をさらに左へ折れたら、バス停だったはず。手前のパン屋さんには、機会があればまた来よう。美味しそうなパンの匂いに後ろ髪を引かれながら、奥に見える交差点を目指して足を動かした。

初出 令和三年五月八日 MAGNET MACROLINKにて公開

五月一五日（月）

芽衣さんは颯爽とキッチンへ入り、食後のお茶を段取りしてくれている。

「急に押しかけたのに、手土産もなくてすみません」

彼女はティーカップを出しながら、「いえいえ」と言った。

「こちらこそ、お昼ご飯買ってきてもらって」

彼女はしゃべりながらも、テキパキと紅茶を入れてくれる。角砂糖の入った瓶と、「子供用の牛乳しかなくて、すみません」とミルクを小分けにして出してくれた。お言葉に甘えて、砂糖とミルクを少しだけ入れる。

「でも、結局ご馳走になっちゃって。良かったんですか？」

私の手元には、かかった費用分の代金がきつちりと積み上げられている。芽衣さんが「いいんじゃないですか？」と笑ってくれたのを見て、財布にしまう決意がようやく固まった。

廊下の奥の方から、A4サイズのクリアファイルを持った森田さんがやって来る。

彼は、芽衣さんの「映美は？」の問いかけに、「向こうでぐっすり寝てる」と返し、私に中の書面が見えるようにファイルを差し出した。

「忘れないうちにコレだけ。と言っても、大したもんじゃないんですけど」

先日のアンケートのようだった。パッと見る限り、ぎつしりと書き込まれているらしく、読み応えは十二分にありそうだった。「先日は本当に、ありがとうございました」

「こちらこそ、いい経験になりました」

森田さんに合わせて頭を下げる。向こうは、「じゃあ、僕はコレで」と踵を返した。「ゆつくりして行ってください」と言い添えて、来た道を帰って行った。

芽衣さんはチャリと壁の時計へ目をやった。もうそろそろ、午後一時三〇分。

「もうそろそろ、上のお嬢ちゃん——」

「あ、ごめんなさい。気にしないでください。今日は旦那もいますから」

彼女は軽く頭を下げると、ゆつたりした雰囲気醸すかのように、のんびりした動きで紅茶を口元に運んだ。在宅ワークがしやすいご夫婦とはいえ、家事にも子育てにも積極的な旦那さんがいるというのは羨ましい。

ジッと芽衣さんを眺めていると、彼女は自分のスマホを手を取った。画面をジッと見て、私の方を見て、「すみませくん」と謝った。

「せっかくのお申し出なんです、身内だけでやろうってことで」

「そうですか」

「何かあれば、お義姉経由でお願いするので、今回はお気持ちだけいただいております」

芽衣さんは「おむつケーキ、可愛かったんだけどなあ」と呟きながら、スマホを操作して返事を打っている。あちらがそういう取り決めをしたのなら、仕方がない。すんなり引いて、また出直すとしよう。

芽衣さんは、「香帆さん、香帆さん」とスマホの画面を私に向けてくれた。ちよつと血色が良くなった新生児と、愛おしそうに抱く若いお母さんの写真。

「晴の一字で、ハルちゃんですって」

芽衣さんは空いている方の手で、空中に文字を書いた。きっと、周りを明るく照らす活発な子に育つのだろう。母子ともに健康なのであれば、それで十分なだけ。

芽衣さんは、画面の中の姪っ子が心底嬉しらしく、とても幸せそうな笑顔を浮かべている。浮かれた陽気にちよつぴり釣られつつ、どのタイミングで、どの道のりで帰ろうか、午後の予定を頭の片隅に思い描いた。

初出 令和三年五月一六日 MAGNET MACROLINKにて公開

六月三日（土）

ルミは食卓で、先日受け取った真新しい雑誌、「ヒイラギ」を拡げている。正確には、武藤さんや森田さんが関与した同人誌というものらしい。差し出がましいことに、創刊号の表紙に、私が描いた絵を使ってもらった。雑誌全体の装丁は浪川さんのデザイン事務所が担当して、表紙の絵も少しだけ指導いただいた。

ルミは最後の最後、裏表紙の目前、奥付までしっかり目を通して、顔を上げた。私は彼女の前に、切り分けたケーキと淹れたての紅茶を置いた。

「コレは、お母さんが作ったやつ？」

彼女はフォークを手に取りながら、ケーキを指差した。私は首を横に振る。

「私はお目付役というか、見守ってただけ」

「じゃあ、ほぼ沙綾さんの手作りだ」

ルミは「いただきます」と手を合わせ、ケーキを頬張った。事前の期待を超えたのか、眉が少し上がる。ゆっくり口の中で味わってから、紅茶を啜る。

「結構美味しいじゃん」

「驚いた？」

「正直、ちよつとびっくりした」

彼女はパクパクとケーキを口に運び、紅茶を楽しんでいる。確かにあのお嬢さんがコレぐらいのケーキをパパッと作れるとは思わなかったけど、持ち込んだ材料と事前の練習が物を言ったらしい。

「お母さんは食べたの？」

「私は向こうで」

お目付役の特権で、出来立てをその場で食べさせてもらった。少し時間が経っているとはいえ、しつかり冷やした分も、十二分に美味しいはず。お父さんこだわりの紅茶も、ケーキの味を引き立てている。

ケーキを食べ終えたルミのカップに、お代わりの紅茶を注いであげる。彼女はとても幸せそうに上を向いて、しばらくボーンツとしていた。私はケーキのお皿とフォークを回収し、ササッと洗ってしまった。

ルミはノロノロとティーカップを持ち上げ、ゆっくり啜った。さつきより温度

は少し下がっていたはずだけど、随分熱そうにカップから口を離した。

「どうしたの？ ボーッとして」

「ボーッとしてるのは、いつものことなんらけど」

ルミは舌を出して口の中を仰ぎながら、カップを置いた。私が冷凍庫から氷を出してあげると、素直に口に放り込む。

「ケーキと雑誌の情報量が多すぎて、処理が追いつかないっていうか、感情が追いつかないっていうか、こう、なんて言ったらいいのかな。言葉になりそうなんだけど言葉にならない感じ」

氷を舐めながら、迸る思いの丈をぶちまける。グーッと強い何かがあるのはよく分かったけど、何を伝えたいかはさっぱり分からない。

「お母さんも読んだんなら、分かるでしょ？」

「私はまだ、読んでないけど」

「自分の絵が表紙に採用された雑誌の、それも創刊号読まないなんて」

ルミの表情がコロコロ変わる。彼女の主張より、その変わりつぷりの方が気になって、話の中身が頭に入ってこない。

「私も編集として関わってるんだから、ちゃんと読んでいてよ。普段は本の虫なのに」

「信じられない」とか、「理解できない」とか、そんな言葉を飲み込んだのかしら。彼女はキッと口を結んで、紅茶を飲んだ。この子がそういう主張をするぐらいだから、きつとよつぼどの雑誌なんだろう。

私は彼女が脇に置いた「ヒイラギ」を手に取り、表紙をジッと眺めた。綺麗に印刷され、ズッシリ重みを感じるそれに自分の絵が表紙として使われているのは、やっぱり嬉しくなる。時間がたつぷりあれば今からでも開くだけでも、そろそろ晩ご飯の支度を始めなきゃいけない。また、お父さんが出かけているタイミングでも読んでみよう。その時は娘と意見交換できたら嬉しいな。

六月二〇日（火）

少々雨脚の強い雨に、遠くの景色が白いベールに覆われている。厚ぼったく、重さも感じるその白さは、薄灰色っぽくも見えた。

目の前のフロントガラスを叩く雨が、一定のリズムでワイパーに拭われていく。この雨の中、カッパを着てバイクに乗るのも、傘を指して少し濡れながら先を急ぐのも、私には到底できそうになかった。

運転席に座る武藤さんは、強い雨と渋滞という組み合わせにも関わらず、楽しそうにハンドルを握っている。私の視線に気がついたらしく、彼は前をしっかりと見たまま口を開いた。

「寒いですか？」

「いえ、大丈夫です」

「じゃあ、ラジオがうるさい？」

「ああ、いえいえ。気にしないでください」

ラジオからは、主に高速道路の情報が流れてきている。高速道路の方は、一般道ほど詰まってはいるとのこと。武藤さんはそれを聞いてか、「そっちに行けば良かったな」と呟いた。

「急いでないので、ゆっくりで大丈夫ですよ」

「でも、いつまでも余所の男と二人っきりでドライブって訳にもいかんでしょう」彼はモノレールの高架まで来ると、一七一号線を右折した。モノレールの高架に沿って南下するらしい。こっちもこっちで混雑しているように見えるけど、彼は目の前に置いた地図アプリの案内を頼りに、車を進める。豊川駅の下を通り過ぎ、道路の向こう側にゴルフの練習場が見えてくる。それも過ぎて真っ直ぐ進むと、左手に緑が増えてきた。

「で、ココを左折、か」

お寺さんのような建物の方に曲がり、天理教の建物だったんだと分かったところで、もう一度左に曲がる。このままグリーンロードを道なりに行って、阪神高速の高架を潜ると、茨木警察署近くの交差点まで行けるらしい。

「何だか随分、アップダウンがある道みたいで、すみません」

「いえいえ。お心遣い、ありがとうございます」

と、武藤さんには言ってみたものの、左手に自然を眺めながらのウネウネ道は、中々に忙しい。交通量はそれほど多くなく、歩行者が急に飛び出してくる心配もなさそうだから、車を走らせる分には割と気楽かもしれないけど、助手席に座っている身には、少々応える。武藤さんの運転でこうなのだから、お父さんの運転だともつとキツいかもしれない。

右側の運動場が見えなくなると、大分穏やかな道になってきた。アップダウンはそれほど気にならない。

「左のこれは、ゴルフ場なんですね」

駅前をうろついているとたまに目にする、カンツリー倶楽部はここらしい。

「ゴルフはされるんですか？」

「いえいえ。全く。主人もたまにテレビで見るぐらいで」

「私も何回か誘われたぐらいで、とんとご無沙汰してます」

武藤さんは穏やかに笑う。体格の良さもあるし、ポロシャツみたいなゴルフウェアも似合いそうなんだけど、普段はほぼ作業着姿しか拝見しない。お父さんもそんなにお洒落な方じゃないし、武藤さんも、着られるものを着ているって感じなのかしら。

「私の顔に、何かついてますか？」

武藤さんは赤信号で止まったタイミングで、チラリと私の方へ顔を向けた。私「いえ、何でもありません」と答えると、彼はそれ以上追求することなく、信号が変わるのに合わせて前を向いた。

「茨木駅のロータリーで良かったんですっけ？」

「厚かましくて申し訳ないんですが、東口の方でも良いですか？」

私のわがままに、武藤さんは嫌な顔一つすることなく、「了解しました」と言った。駅まで送ってもらって、阪急オアシスに寄って。今晚何を作ろうか、頭の片隅で考えながら、武藤さんの横顔に「ありがとうございます」と告げた。

七月一〇日(月)

お店の出入り口まで芽衣さんたちをお見送りしていた郁美さんが、席まで戻ってきた。

彼女はソファ席に腰を下ろすなり、アイスコーヒーをたっぷり吸い込んだ。

「芽衣さん、大丈夫そうでした？」

映美ちゃんを連れて駅前からバスで帰ると言っていたけど、間に合うのだろうか。郁美さんは「大丈夫、大丈夫」と脇に避けたメニューを開きながら言う。

「アルプラザのところまでなら、割と何本も出てるみたいだし、間に合わなければ駅前で買物でもするそうで」

そういわれると、私も駅前からバスに乗った時は、割と選択肢が多かった様な気がする。乗り場が分散していて、どこかの何分発に乗ればいいかはちょっと困ったけど。映美ちゃんはお利口さんだからいいけれど、小さなお嬢ちゃんを連れてのお出かけは大変だろうなと、遠い記憶を辿りながら、さっきまで目の前にいた二人に想いを馳せた。

「デザートとか、注文しません？」

郁美さんは、グランドメニューとは別に添えられた季節限定メニューを見ている。三角に立てられている小さいメニューにも、「メロン」の文言が踊っていてとても美味しそうに見える。

とはいえ、今し方ランチを食べたばかりで、あとはコーヒーぐらいしか入りそうにない。一口二口食べるぐらいならなんとでもなりそうだけど、隣や向かいのテーブルに運ばれてくるデザートを見る限り、食べ切るには少ししんどそうなサイズに思える。

「私はもうお腹いっぱい」

「じゃあ、味見だけしません？ 食べれるなら半分でもいいんですけど」

郁美さんは目を爛々と輝かせながら、私に同意を求めてきた。同意というよりは、背中を押して欲しそうにも見える。新メニューの開拓、インスピレーションを得るというのもありそうだし、仕事と思つて頷いておく。

彼女は躊躇なく呼び出しボタンを押し、メロンを半分使ったメニューを注文し

た。

「パフェは流石に厳しいし、シフォンケーキはなんとなく想像できるんですけど、こういう映えるメニューは、自分でも挑戦してみたいですよね」

彼女は心底楽しそうに、デザートが届くのを待っている。自分のアイスコーヒーを飲み切ると、私のカップも気にかけてくれた。

「そんな、自分で行きますから」

「私もついでなんで。座っててください」

郁美さんの言葉に甘えて、ホットコーヒーのお代わりを頼んでしまった。彼女は空のグラスとカップを両手に持ち、向こうのドリンクバーへ歩いて行った。彼女がおかわりを持って戻ってくる間に、デザートはまだ運ばれてこない。ランチには少し遅い時間帯だけでも、どうやら人手が足りないらしい。

「来週、本当に良かったんですか？」

郁美さんは「いいんです、いいんです」と手を振りながら言った。

「身内のことなんで、身内でやります」

「ルミの時は良くしていただいたのに」

「だって、娘さんじゃないですか。こっちは実の父親ですから、なんでもいいんですよ」

郁美さんは豪快に笑うと、ようやく運ばれてきたデザートに目を向ける。スマートフォンで角度を変えながら何枚か写真を撮り、肉眼でも矯めつ眇めつ眇めてスプーンを差し込んだ。ここから眺めていてもとてもみずみずしそうな果肉と、メロン独特の香りが鼻をくすぐる。コレは中々、美味しそうだ。

初出 令和三年七月一八日 MAGNET MACROLINKにて公開

八月一八日（金）

先月末に刷り上がったばかりの『ヒイラギ第二号』をめくりながら、次号の表紙に掲載する絵をどうするか、ぼんやりと考えてみる。参考資料に、もう一つ前の創刊号も鞆の中には入れておいた。

こうして、しつかりと物になって、確かな重みを纏ってくれていると、関わった作り手としては非常に誇らしい。締め切りギリギリまで粘って入稿した今回の表紙も、我ながら素晴らしい。もうちよつと手直しかつた気もするけど、こうやって印刷物になってしまうと、これはこれで良かったんだろうなと、諦めきれなかったモヤモヤを自分の手で成仏させておく。

「もつとこうしたい」とか「もつとこうしたかった」という悔しさが多少あるのは悪いことじゃない。次に何かしらの形で生かせれば十分だ。程々の不満を残しつつ、無理のない範囲で向上心を育ててあげよう。と、そこまで妄想したのはいいとして、次の表紙をどうするか。既刊の二冊を並べてみても、「これだ」という確信、大まかな方向性すら出てこない。焦ったところでダメな時はダメだし、頑張ってみたところで解決するものでもないのだけれど、すぐに次の締め切りは来るし、そろそろ何かしらの案は用意したい……。

このまま一人で煮詰めていても仕方ないし、とりあえず、紅茶のお代わりを入れに行こう。私はカップを持って、向かいの壁際にあるドリンクバーへ歩を進めた。夏休みの真っ只中、金曜日のお昼過ぎにしては、思ったより混んでいない。自分と同じような年代の、近隣の主婦っぽい人たちがチラホラとグループで座っていたり、ファミリーで遅めのお昼を食べに来ている組がいたり、保険の勧誘か説明を受けている人が窓際の席に座っていたり。絵に描いたような普段通りのファミレスに、私も身を置いていた。

「あら、芽衣さん？」

普段通りのファミレスから少し外れそうな雰囲気、妙齢の女性が一人でテーブル席に座っていた。目の前には、まだ何も書かれていないB5サイズの紙が置いてある。鉛筆と消しゴムも入った筆記具を横に置き、無言で紙と向き合っていた。周囲の和やかな雰囲気とは少し違う、ピリツとした空気を纏っている。アナロ

グ派の漫画家さんがいるのも、ファミレスとしては普段通りの範疇なのかもしれない。芽衣さんは私の視線にようやく気がついたらしく、穏やかな表情で会釈した。どうやら彼女も、来月号の原稿と向き合っているらしい。お互いに深い探り合いはせず、簡単な挨拶だけに留めた。私は新しい紅茶を片手に、自分の席へ戻る。

私が自分の席に戻ってから、芽衣さんはしばらくじっと紙を見つめている。その向こうに広がる無限の世界から、何かを掴み取ろうとしているのだろうか。彼女は空中になんらかの絵を指で描いたかと思えば、鉛筆を取って軽い動きで線を引き始めた。ここからでは詳細は何も分からないけど、物凄いスピードで紙が入れ替わっていく。あつという間に、程々の厚みが積み上げられる。

芽衣さんは紙の上を軽く手で払い、ゴミを避けるとラフな線を引いた紙を丁寧に束ねてカバンにしまった。筆記具を筆入れにしまい、自分の出したゴミを持ち帰るように片付けていく。

あんな人と、同じ雑誌に関わっているだなんて。あの素晴らしさを少しでも表現できたらいいのだけれども、私が見つめる白い紙には、まだ何のイメージも湧いてこなかった。

初出 令和三年一〇月一〇日 MAGNET MACROLINKにて公開

八月二三日（水）

「駅まで見送ってもらっちゃって、すみません」

ガストでの打ち合わせを終え、今からまだ梅田で用事があるという郁美さんと、駅の改札前までやって来た。私は、自分の歩きが遅くなかったか尋ねると、彼女はすぐさま、「いえいえ」と否定してくれた。

「それに、まだまだ余裕がありますから」

彼女によると、午後七時に阪急梅田駅に着けば十分なのだとか。今から乗ると、確かに三十分ちよつと早そうだ。

「慌ててガストを出なくても良かったんですね」

「でも、香帆さんもお忙しいでしょうから、あんまり長居しても」

彼女は私を気遣いながら、改札の奥にある案内表示をチラッと見た。ちようどいいタイミングで、次の特急がやってくるらしい。

「じゃあ、日曜日はよろしくお願いしますね」

彼女は颯爽とパスケースを取り出し、流れるように改札を通り抜けて行った。ホームへ上がる前にこちらへ改めて頭を下げると、エスカレーターの方へ姿を消した。

午後から打ち合わせを二本やり終えて、あつという間に午後六時。まだ明るい時間帯だけでも、駅を抜けてイオンを見て帰るのはちよつとシンドい気もする。せめて帰り道の無理のないところで寄り道するぐらいだろうか。

土曜日に買い出しに行った分で基本的に賄えるけど、何か面白いものがあれば買って帰りたい。とりあえず、下へ降りて、阪急オアシスを回って帰ろう。

駅前の塾に向かう小学生や、今から家に帰る子供たち、部活帰りや学校帰りつぽい高校生の姿もチラホラ。時折自転車に道を譲りながら、中央公園の方へ曲がる。道路向かいの角のラーメン屋さんは、今日も沢山並んでいる。

哲朗くんぐらいの年頃なら、友達と連れ立って並んだりするんだろうか。でも、彼にああやって行列に並んでラーメンを食べるイメージがあまりない。一人暮らしだというし、年相応にインスタント麺なんかも食べそうだけど、割と健康そうないメージもある。

彼よりは、武藤さんの方が似合うかなあ。濃厚なラーメンとか、街中の中華屋さんが好きそうなイメージ。濃い味付けを好みそうな気がするけど、日曜日ではきるだけ身体に気を遣った味付けにしよう。

駐車場から出てくる車を一台やり過ぎし、阪急オアシスの中へ入る。そんなに買わないと思うけど、カートにカゴを載せ、青果コーナーから順番に眺めていく。この辺りに目ぼしいもの、目新しいものは特にないかなあ。

お肉もお魚も間に合っている。お酒も必要なものはあるし、乳製品やパンも急いで買わなきゃいけないものは特にない。あとは調味料のコーナーぐらいか。後ろに気をつけながらカートをキュッと左へ向ける。向こうに見える「だし」のところから見えて行こう。

お味噌も出汁も、ビビッとくるものは特にない。塩、砂糖も特別に欲しいものはない。お酢やみりんも間に合っている。あとはソース、ケチャップぐらいか。カートを押しながら、そっちのコーナーへ入った。

「あれ、小野寺さん」

数時間前まで打ち合わせをしていた哲朗くんが、真剣な面持ちでソースの棚の前で立っていた。私は「こんばんは」と挨拶すると、彼は私の荷物を見るなり、

「あの後、ずーっと打ち合わせされてたんですね」と言った。

「いい話できました？」

私が頷いて返すと、彼は「それは良かった」と微笑んだ。

初出 令和三年一〇月一〇日 MAGNET MACROLINKにて公開

九月一七日(日)

ルミは家の中を見回しながら、リビングまで入って来た。電器屋さんのビニール袋と、マクドナルドの紙袋を入れたビニール袋を両手に下げている。重たそうなマクドナルドの方を食卓に起き、小さい袋を持ってキッチンの方へ入って来た。「アルカリの単二で良かった？」

彼女は目の前のカウンターに、電池の入った袋を置いた。そのままシンクで両手を洗う。私は彼女の置いた袋を覗き込み、品物を確認する。

「一個で良かったのに、とか言いたいんでしょ？ バラ売りしてなかったから、二個入りが一番小さかったの」

私は何も言っていないのに、彼女は一人で少々不機嫌そうに言った。手元に下げたタオルで両手を拭い、食卓の椅子に腰掛けた。

私は引き出しを開けて財布を取り出す。

「レシートは？」

彼女は首を振って、「良いから、良いから。早く食べよう」と私を手招きする。

私はとりあえず財布をエプロンのポケットに入れ、彼女の向かいに座った。

「本当にいいの？ お昼も出すけど」

「だから、良いって。一回の飲み放題より安いんだし」

私には、「飲み放題」の相場がイマイチ分からないけど、ルミは私のことなど気にかけることなく、自分で買って来た袋をガサガサと音を立てながら開けていく。

「一個はポテトのセットにしたけど、一個は単品ね。ドリンクはコーラにしたんだけど、要る？」

私が首を横に振ると、彼女はニヤツと笑って、「じゃあ、もらうね」と自分の手前に置いた。中身を全部取り出したらしく、彼女は大きい方の紙袋をグシャグシャに潰してビニール袋の中へ放り込んだ。もう一つの小さな袋は、横にそのまま避けて置かれた。

「そっちの袋は？」

「期間限定のシェイク二つ」

ルミは「Sだから大丈夫」と付け加えた。

「こつちがいつものので、こつちが何だっけな。なんかチーズがすごい奴」

彼女は大小二つの包みを、真上から指差した。「どつちでもいいよ？」と言われると大きい方に目が行くけど、そんなに食べられる歳ではない。例年通りの「いつもの奴」を選んで包みを開けた。まだほんのり温かく、両手に熱が伝わってくる。

「じゃあ、いただきます」

私は思い切つてかぶりついた。独特の食感をした卵が、お肉に負けじと存在を主張している。大きい方を選んだルミは、サイズに四苦八苦しながら一口食べた。鼻の頭に黄色いチーズが乗った。

彼女は両手についた汚れも気にすることなく、そのままコーラを流し込んだ。しばらく忙しなく口が動き、ゴクツと飲み込むと共にキラキラした目でこちらを見た。

「コレは、凄いわ。去年も凄かったけど、それを超えて来たね」

ルミは一度ハンバーガーを包みごとお皿に置いて、卓上のティッシュで鼻を拭いた。

「一口食べる？」

「じゃあ、一口だけ」

自分の包みを一旦置いて、ズッシリと重みのあるハンバーガーを手を取った。形が大きく崩れなさそうなところを見極め、少し潰しながら嚙る。濃厚でややクセのあるチーズと、特製ソース、中の卵が非常に合っている。私はハンバーガーをルミに返して、さっきまで飲んでいたお茶を飲んだ。

「本当に今日も、お父さんいないんだよね？」

ルミはポテトを摘みながら言った。

「夕方には帰るって言ってたけど」

「じゃあ、それまでにシェイクも片付けなくっちゃ」

ルミは「ふふふ」と笑った。

一〇月一七日(火)

章二さんは、お店の入り口近くにある大きな冷蔵庫の前で、お店の人と楽しそうに喋っている。さつきもさつきで、カウンターの中间にいる調理担当のスタッフさんや、カウンターで喋っていた他のお客さんに声を掛けていた。

「社交的なお父さんなんですネ」

隣のテーブルから、浪川さんがルミに声をかけた。

「社交的、なのはいいんだけど全然戻ってこないよね」

ルミは章二さんの方へ視線をやりながら、少々ぶつきらぼうに言った。彼女が言うように、章二さんは私たちの席へ戻ってこないし、案内されてからズット歩き回っている。

「あんなに落ち着きのない人だったっけ」

「落ち着きがないと言うか、サービス精神が旺盛なんでしょうね」

家ではブスツとしているか、偉そうにふんぞり返っているか、側から見ると絵に描いたような「面倒臭そうながんこ親父」をやりがちなんだけど、本来は、あんな感じで好奇心旺盛かつ社交的な人。

「家でもあんな良かったのに」

「内弁慶で不器用な人だから」

ルミは「内弁慶にも程があるって」とボヤいた。彼女にとっては、ただただ厳しくて怖い父親の姿しか見せていなかったから、その気持ちは分からなくもない。父親としてそういう振る舞いしか知らなかった、できなかった章二さんの気持ちも分からなくもない。

「前に一度、お会いしたことありません？」

浪川さんの向かいに座っている作業着姿の男性が、私の顔をジッと見ながら言った。私は頭の中に疑問符を浮かべながら、相手の顔をジッと見る。浪川さんと顔や全体的な雰囲気がよく似ている気がする。視線を引いて、浪川さんと向かい合って座っている姿をぼんやり眺めると、なんとなく見覚えがあるような気もしてきた。

すると、向こうが何かを思い出したらしく、「そうだ、そうだ」と声を上げた。

「あの時に隣に座っていたオバさんだよ」

彼は向かいの浪川さんに「ホラ、あの時の」と迫るものの、浪川さんは「あの時？」とまだピンときていないようだった。

「半年ぐらい前かな。まだ寒い時に、商店街近くの喫茶店で一緒にメシを食った時」

半年前？ 商店街近くの喫茶店で浪川さんと出会ってたっけ？

私のがんびり頭を捻っていると、浪川さんは「ああ、あの時の」と思い出したらしい。

「スケッチブックを勝手に弄っちゃった時の」

スケッチブック？ そういえば、喫茶店でスケッチブックを見直していた時に、色鉛筆で横から手を出されたっけ。もしかして、あの時のスーツの男性と、作業着の男性が彼らなのか。

「その節はすみませんでした」

浪川さんは座ったまま深々と頭を下げた。あの時の彼が「あの浪川一輝」なら、瞬時に的確な加筆ができたのも、納得できる気がする。私は深く頷き、半年ほどの疑問をお腹に落とし込んでいく。

「いえいえ。浪川さんのおかげで、いい絵になりました」

私もお礼を込めて深々と頭を下げた。それを見ていたルミは訝しげに、「なんか、随分と畏つてない？」と言った。

「だって、あの浪川一輝くんでしょ？ 手ほどきを受けるなんて光栄じゃない」

ルミは全くピンときていない様子だったが、浪川さんは「いえいえ。昔の話ですから」と謙遜していた。確かに私の知っているのは子供の頃の彼の活躍だけど、最近も色々と活躍しているのも知っている。

ダメで元々と章二さんを誘って外へ飲みに出てみたら、憧れの人と隣の席でお酒を飲めるだなんて……。

初出 令和三年一〇月二六日 MAGNET MACROLINKにて公開

一〇月二七日（金）

来月末の第四号に向けた表紙の初稿が仕上がった。各々の「痛々しき」を大切にしていくヒイラギでは、余程のことがない限り、修正はかからない。文字を載せたときの色味補正や入稿用にデータの修正はあるだろうけど、とりあえず目下の気になることはクリアできた。

データの送付やその後のやりとりは自宅に戻ってからゆつくりやるとして、仕上がったばかりの目や気持ちを一且冷ましていく。場所を貸してくれたルミに、お礼を兼ねて掃除でもして行こう。

建て替えた頃に、ルミのリモート勤務が決まったため、ほぼ彼女の一人暮らしと仕事用の家になっていた。時々来ることがあっても、玄関とリビング、トイレぐらいしかウロウロしていない。

食器棚や冷蔵庫はほとんど残して行ったため、新しめの壁や床に大してミスマツチな印象は拭えなかった。で、肝心の掃除用具だけど、建て替える前に使っていた納戸と似たような場所に仕舞ってあった。一旦掃除機を引っ張り出し、リビングまで持つていく。

コートなしだと少々肌寒いけど、窓という窓を全開にする。コンセントを差し込んで、近い場所から掃除機をかけていく。色んなものが新しくなっているはずなのに、構造自体はあまり変えていないからか、とても懐かしい気持ちになってくる。

コンセントを挿しては外し、掃除機を持つて順番に家の中を回っていく。在りし日のルミや章二さんの影を思い浮かべながら、色んなことを思い出してしまう。掃除機を一通りかけ終え、元の納戸に片付けた。入れ替わりで床拭きモップを取り、ウエットシートを付け、掃除機をかけた順番で床を拭いていく。掃除機をかけた時にも気になったけど、ルミはあまり熱心に掃除をしていないらしい。ウエットシートの両面をしっかりと使い切りながら、何枚か取り替えたところでようやく床拭きもひと段落ついた。

床拭きモップも納戸に戻し、キッチンへ移動した。ガスコンロの周りやレンジフード、中の換気扇の汚れも気になるし、シンクの中や蛇口の汚れも気になって

きた。もうそろそろ大掃除も始めないと、年末にパパッとやるだけじゃダメだぞ
と思いながら、ここはもうルミの家だから、と割り切ることにした。

簡単な掃除で身体を動かしている間は気にならなかったけど、流石に窓全開は
寒くなってきた。キッチンの窓と向かいの掃き出し窓だけ小さく開け、後の窓は
順番に閉めて回った。ついでにカーテンも閉めておく。

再びキッチンに戻って、冷蔵庫やストッカーを開けてみた。乾物や乾麺、野菜
の類はあまり入っていない。色んなインスタント食品や冷凍食品、お酒や加工肉
は潤沢に入っていた。調味料が入ってそうな扉を開けてみるもの、みりんやお
酢が切れていた。

晩ご飯に何か作って、それもお礼にしようかと思っただけど、これでは作りよう
がない。平和堂にでも行って帰って、何か作ってもいいんだけど、それはやり過
ぎな気がする。

冷蔵庫の前で一人で悩んでいると、玄関で鍵の降りる音がした。そちらへ目を
やると、スーツ姿のルミが姿を現した。

「あら、おかえり」

「ただいま」

ルミはカバンを食卓に置きながら、「どう、捗った？」と訊いてきた。

「おかげさまで、一区切りつきました」

「それは良かった」

ルミは荷物をそのままに、両手を洗いに洗面所へ向かった。私はその背中を見
ながら、何から話そうか、頭の中で色々と考え始めた。

初出 令和三年一〇月二八日 MAGNET MACROLINKにて公開

一月二十六日(日)

日が暮れてから、ほろ酔い気分で帰宅する。それも、平日じゃなくて日曜日に。若い頃や独身の頃でもやったことがないのに、今になってやれるようになるとは、人生は分らない。

今日は一日一人で外出し、郁美さんと一足早い忘年会も済ませてきた。自宅の鍵を開けていると、カバンの中でスマホが鳴った。通知を見ると、郁美さんから「無事に帰宅しました」のメッセージが届いていた。

とりあえず家の中に入って、玄関で靴を脱いでから、私も似たようなメッセージを送り返した。顔を上げると、リビングの方から賑やかな音が聞こえてくる。

「おかえり〜」

リビングに続くドアを開けると、ルミが食卓でお茶を飲みながらおかきを食べていた。彼女は壁の時計を見て、「案外、早かったね」と言った。

「もつと遅くなるかと思った」

「私もそのつもりだったんだけど、日曜日だから閉まるのが早くって」

私はリビングにカバンを置き、コートを室内干しのラックにかけた。洗面所に行くか迷いつつ、片付け具合の確認も兼ねてキッチンのシンクで両手を洗った。パッと見るかぎりでは、洗い物も残っていないし、水切りカゴにもマグカップぐらいしか残っていない。コンロの周りも綺麗に片付いている。

水切りカゴに伏せてあったコップを取って、水道水を蛇口から注いだ。酔い覚ましに一口飲む。カウンターから食卓の方を見ると、椅子の上に畳んだ洗濯物も置いてあった。

ルミはかなりダラつとした体勢でテレビを見て、時々釣られて笑っている。どうやら自分で買ってきたらしいおかきも、順調になくなりつつあった。

私はコップを空にして、サツと洗って水切りカゴに伏せた。自分の湯飲みを食器棚から取り出して、ルミの隣に腰を下ろす。ルミはテレビを横目で見ながら、私の湯飲みにお茶を注いでくれた。よそ見をしながら急須を持つから、置き直す瞬間にちよつとヒヤツとした。

「せっかく全部やってくれたのに、よそ見で台無しね」

私の言葉に、ルミは「えー、溢してもないのに？」と口を尖らせた。その反応がおかしくて、私はつい吹き出してしまった。

「冗談、冗談」

「もしかして、まだ酔ってる？」

ルミのツツコミに、私は「まさか」と言っただけで、心地いい気分はまだ抜けていない気もする。

「で、お父さんは？」

最近寝るのが早くなっているとは言え、流石にまだまだ早過ぎる。娘だけ残して外に出るとは思えないけど、どうも姿が見当たらない。

「ああ、お風呂」

ルミは風呂場の方へ視線をやった。そう言われると、そっちから音が聞こえてくるような気もする。やっぱりまだまだ酔っているらしい。

テレビを見て楽しそうに笑うルミをぼんやり眺めながら、ゆっくりお茶を啜る。ジッと見ていると、ルミはこちらを見て、「なんか、見たいものあった？」と訊いた。

「ううん。別に。何時までいるのかなと思って」

「心配しなくても適当に、というかお父さんが出てきたら帰るよ」

別に早く帰って欲しいという意味ではなかったのだけれども、彼女も彼女でそろそろ引き上げようとしていたのかもしれない。ルミは時計と風呂場とをチラチラ見ながら、残りのおかきに手を伸ばした。

初出 令和三年二月八日 MAGNET MACROLINKにて公開

一二月七日(木)

武藤さんに印刷していただいた地図や書類に目を通してしていると、横に座っていた哲朗くん「当日はアテンド、頼むぜ？」と肩を叩きながら言った。そう言われた哲朗くんは、いつになく歯切れの悪い言い方で、「はい」と返事をした。

「一応お願いしてる側なんだから、もつと気持ちよく返事しろよ」

武藤さんは、「ねえ？」と同意を求めるように私の方を見る。

「自分家の話なんだし、依頼主とのやり取りなんかも、ちゃんとサポートしてくれよ」

「それは、もちろん分かってますよ」

「分かっているなら、相応の言い方でもんがあるだろ？」

武藤さんの言い分もよく分かっているからか、行き場のない感情に苦しんでいるようだった。不機嫌とは似て非なるニュアンスで、哲朗くんは「すみません」と私に頭を下げた。

「私は別に良いから、気にしないで。武藤さんも、ね？」

私は武藤さんに笑いかけたが、彼は微妙に納得していない様子で、「そうですか？ じゃあ、良いんですけど」とボヤキもトーンも織り交ぜて言った。

「兄貴、電話」

電話に対応していた香織さんが、武藤さんと呼んだ。彼はそれに返事をして、相手の名前と何番の保留かを確かめる。「ああ、あの件ね。了解」と腰を上げた。「じゃあ、あとはよろしくお願いします」

私たちにそれだけ言い残して、彼は自分の席へ戻って行った。すぐに受話器を取って、電話口の相手と何か話し始めた声が聞こえてくる。私は手元の資料に視線を戻し、まだ目を通していない部分にサツと目を通す。メニューや予算、スケジュールも事前に打ち合わせた通り。地図に関しては、武藤さんは武藤さんでも幸次さんにも同じものが渡っているのなら、特に困ることはない。

万が一があるようなら、哲朗くんに案内してもらえれば大丈夫だろう。確認し終えた書類を持ち帰るべく、武藤さんからいただいた新しいクリアファイルにそれらを収めた。資料から顔を上げると、まだ暗い雰囲気を漂わせている哲朗くん

が、鎮痛な面持ちで座っていた。

「何か、気になることもあった？」

私は小声で哲朗さんに話しかけた。彼は一瞬驚いたものの、「え、ああ、何でもないです」と言った。

「本当に？ タダのおばちゃんには話せない？」

私が笑顔を作ると、彼は社長の方を一瞬見やった。まだまだ話は盛り上がっているようで、だんだん声のボリュームが大きくなっている。彼は私の方へ僅かに身を寄せた。

「実は、夕方からみいちゃんと約束があつて」

「もしかして、神戸の？」

声を抑える彼に合わせて、私も小声で言うと、彼は小さく頷いた。そういえば、ルミもそんな話をしていたような気がする。

さっきのスケジュールをもう一度確かめると、午後三時頃までの予定にはなっている。そこから片付けなり順調に進めても、解散は早くて午後四時前。彼だけ現地解散にしてもいいけど、それでも先約の集合時間に間に合うかは、彼にしか分からない。

スケジュールとメニューにもう一度目を走らせる。最初は居てもらった方がいいけど、後半は別に我々だけでも問題はない。

「集合時間と、場所ってどうなの？」

私はスケジュールを広げて、哲朗さんに問いかけた。彼の答えを聞きながら、当日の進行と展開の予想を擦り合わせていく。動かせそうな予定と、出なきやいけないタイミングをやりとりしていると、だんだん哲朗さんの表情が明るくなってきた。

「じゃあ、そういうことで」

私がそう言うと、彼は元気よく「よろしくお願いします」と言った。

一二月二五日（月）

芽衣さんは、向かいのキッズスペースで子供達と遊んでいる義理の妹さんに、笑顔で手を振っていた。私たちは、家族連れで賑やかなフードコートの中、少し離れたところからコーヒー片手にそれを眺めている。

芽衣さんは、椅子に置いた荷物がずり落ちないように、手を添えながら積み直した。

「沢山借りるんですね」

私はその量に、つい声に出してしまった。彼女は「ええ、まあ」と頷いて、

「ほとんど、子供の絵本ですけどね」と付け加えた。

「中央図書館の方が近いし、選択肢も多いんじゃないですか？」

「そうなんですけど、時々、違うところを見たくありません？」

彼女の答えに、私は無意識に頷いていた。

「実は私も、そういう気分です」

「あー、じゃあ偶然が重なって」

芽衣さんは心底楽しそうに笑った。一瞬、視線が子供たちの方へ向いた。私も釣られてそつちを見るものの、何事もなかったらしい。義理の妹さんと目で合図し合い、再びこちらに視線が戻る。

「そういえば、この間のルミちゃん、活躍ご覧になりました？」

芽衣さんはカバンからスマホを取り出した。先日のクリスマス会で、普段一緒に練習している方々とお披露目会をしたのは、知っている。動画もつい先日、見せてもらった。芽衣さんは、彼女が個別に記録した写真や動画を私に見せてくれる。先日見た公式記録の動画より、躍動感や息遣いがリアルに思えた。

「カッコよかったなあ。衣装が少し派手だけど、それを上回る躍動感がもう最高でした」

芽衣さんは目をキラキラ輝かせて、興奮気味に捲し立てた。現場で見ていた彼女の様子も、なんとなく目に浮かぶ。

「創作意欲も刺激されました？」

「それはもう、バリバリと」

私はボソツと呟いたつもりだったのに、彼女はオーバー気味にリアクションしてくれた。反応の大きさに自分で気がついたらしく、「あ、すみません」と身体を窄めて、軽く頭を下げた。

「じゃあ、もう次の原稿も終わっちゃいました？」

私は心がないふりをして、そのまま畳みかけてみる。芽衣さんは、「ああ、いえ、まだ」と、さっきまでの勢いが嘘のように、萎んだ風船みたいになっていた。「でも、年内には手を付けますよ。手をつけて、可能ならそのまま仕上げまで」

芽衣さんは力強く言い切った。その言い切りっぷりは流石だなと思わされる。あの時垣間見たプロフェッショナルなスタイルを学ぶなら、ここで切り出さなきゃいけない。私は意を決して、口を開いた。

「お邪魔でなければなんですけど、その様子、見せてもらってもいいですか？ 見せてもらうっていうか、一緒に作業させてもらうというか」

私は早口で言葉を付け足していく。どうしても学びたい気持ちの前に出過ぎて、どうにかこうにか飲みやすい条件にならないか、相手の顔も見ずにアレやコレやと切り出してみる。

「ダメ、ですよね？」

私は恐る恐る顔を上げた。芽衣さんの顔を見ると、ちよつぱり怖い気がした表情は、さっきまでの若いお母さんのソレと全く変わらなかった。

「別に、いいですよ。旦那も子供もいないはずだし」

彼女の軽い言い方に、私はホッと胸を撫で下ろした。

「ただ、途中の原稿は見ないでくださいね。恥ずかしいんで」

彼女は口に手を添えて、小声で私に言った。完成した原稿がそれなりの人に見られるというのに、恥ずかしいというのは意外な気もする。反面、私と同じ気持ちなんだと安心もした。

「貴重なお絵かき組ですもんね。一緒に頑張りましょう」

芽衣さんは私に、スツと手を差し出した。私はその手を取って、「こちらこそ、よろしくお願いします」と握り返した。

二月三十一日(日) 午後三時

パイとコーヒーを乗せたトレイを持って、ルミがテーブルまで戻ってきた。期間限定のパイもまだあったそうだけど、彼女はいつものアップルパイを選んでいた。私は彼女が運んできたSサイズのホットコーヒーを手元に移した。

「ブラックで良かったっけ？」

ミルクも砂糖も貰わなかったけど、とルミは言った。私はどっちでも良かったけど、頷いた。

「そっちこそ、いつもので良かったの？」

「結局、これになるよね」

ルミはアップルパイの封を開け、慎重にかじりついた。それでも熱いらしく、口の中から熱を逃しながら食べている。落ち着いたところで、ホットコーヒーをブラックのまま啜った。彼女は口の中を冷ますように息を吐く。意を決して、もう一度食らいついた。

「で、三つ葉の買い出しは良かったの？」

彼女は相変わらず熱を逃しながら、口を動かしている。

「買い出しも行きますよ。でも、こういうのもしたいじゃない？」

ルミは私に、「まあね」と同意した。周りを見渡すと、私たちのように近所から来ている親子連れや、ドライブがてらに立ち寄った人たちもチラホラみかける。ちやうど混み合う時間帯らしく、私たちの後からレジ前の列が長くなっていた。

「考えることはみんな一緒っていうか、タイミングも一緒なんだもんね」

「その洗車場もいっぱいだったもんね」

ルミと一緒に歩いてここまで来たけど、ケーキ屋さんの横のセルフ洗車場が賑やかだった。今日まで開けてくれているスーパーや食品売り場も、きつと駆け込みのお客さんでいっぱいだろう。

「三つ葉の買い出し」なんて、章二さんを置いてルミと外に出るための方便だから、無理に買わなくても構わない。あまりにもごった返しているようなら、適当に散歩して帰れば良い。

「お母さんたちはどっか行かないの？」

ルミは食べ終えたアップルのパッケージを、トレイの上でクシャツと丸めた。「そういうあなたは、どこか行かないの？ 年末年始に、無理に実家で過ごす必要もないんだし」

どちらかと言えば、私たちがルミの元へ行く方が過ごしやすそうもんだけど、彼女は「だって、あっちの方が広くて寒いんだもん」と言った。

「一緒にどつか行く相手もないし、お母さんと一緒に、人混みもあんまり得意じゃないし」

「積極的に見つけに行かないと、いつまで経っても独りのままよ」

ルミは「分かってますう」と、ムスツとした。むくれている表情もそれなりに可愛いと思うんだけど、親バカかしら。先日見せてもらったダンス動画も、中々良いセン行つてそうなんだけど、周りが既婚者ばかりだから？

ここで「イイ人」とか言い始めたなら収集がつかないから、この辺で辞めておく。親が勝手に動いて見つけてきても、反発するだけだろうし、本人がその気になるまで見守る他ない。

「そういえば、あの荷物に何が入ってるの？」

私は話題を無理やり変えた。彼女が引つ張ってきたスツケースの中身を訊ねる。

「お父さん用のお酒と、家で余ってたお菓子」

「じゃあ、おつまみも見て帰らなきゃ」

この辺りのスーパーで、三つ葉とお父さん好みのおつまみを買えるところほどこだったかな？ コーヒーを飲み終えるまでに、できるだけ空いてそうなところを捻り出したい。今年こそ少しくらい、ゆつくりできると思ったのに、最後までバタバタ確定か。

(完)

初出 令和三年二月二日 MAGNET MACROLINKにて公開